



女性の「活躍」を
阻害する日本型雇用

働く女子の運命

濱口桂一郎 著

2015年12月発行／新書判／
256頁／780円／文藝春秋

男女雇用機会均等法が97年に努力義務から法的義務に強化され、育児休業法も充実し、女性労働に関する法制度は欧米諸国に比べても遜色はない。しかし、なぜ日本ではこんなにも職場で女性が「活躍」していないのだろうか。

本書はこのように問いを立て、徹頭徹尾「日本型雇用」を軸に明治から現在の「女性活躍推進法」に至るまでの女性労働の歴史を、経営者団体・政策担当者の報告書、裁判の判決文、女性労働者の回顧録、労働組合や研究者の認識などの豊富な資料によってたどり、女性の「活躍」を阻害するものが長時間労働と職務の無限定性が前提の日本型雇用であることを明らかにする。

欧米でも70年代までは女性差別意識が強かったが、それ以降雇用分野の男女平等が大きく進展した。欧米はジョブ型社会であり、同じ職務を遂行するスキルがあれば、女性を男性の職域から排除する根拠はない。女性たちは様々な抵抗に遭いながらも、この仕組みに乗って男性のものとされた職域に進出していった。一方、メンバーシップ型社会である日本では、長時間労働や転勤を進んで受け入れるかが人事考課の対象なので、家事や育児の責任を負う多くの女性は、日本企業において男性並に扱われない。

著者は、育児・介護休業法や労働時間の柔軟性のような「第二次ワークライフバランス」以前に、まず労働時間の上限規制や勤務間インターバル、時間限定正社員などの「第一次ワークライフバランス」が重要であると強調する。「女性の活躍」が政策的に強調されるなか、根本的な問題に迫るためにぜひ一読をお勧めしたい。